

兵庫県におけるシルビアシジミの吸蜜植物

島崎 正美¹⁾

成虫として行動範囲が広くはないシルビアシジミ(以下, 本種)にとって吸蜜できる植物はかなり限られるが, 広畑・近藤(2007)によれば, 兵庫県における本種の吸蜜植物として, ミヤコグサ, シロツメクサ, ヒメジョオン, ニガナ, キツネノマゴ, カタバミの6種の観察記録が示されている。筆者は, 絶滅危惧IB類選定種として保護しなければいけないという視点で本種の生態調査を継続する過程で, これまでに見たことがないツリガネニンジンに口吻を伸ばす個体を観察したことから, 本種の吸蜜植物に関して過去の観察記録を整理すると, ツリガネニンジンに加えてヨメナ, アメリカセンダングサを確認できた。公式に報告されていないだけで新発見とは言えないかもしれないが, 広畑らが記載している花: ミヤコグサ, カタバミを含め, ヨメナ, アメリカセンダングサ, ツリガネニンジンで確実に口吻を伸ばして蜜を吸っている画像を添えて報告する。観察記録地はすべて加古川市内の田園地帯土手斜面一か所である。

蝶が蜜源として訪れる花の色に着目すると, ギフチョウがスマシレなど青系統の花を好むことから, 採集者が青色の補虫網(ネット)を愛用することはよく知られており, 緑色ネットにはアゲハチョウやアオスジアゲハが頻繁に近寄ってくる。また, 沖縄や八重山諸島ではハイビスカスやサンダンカなどの赤い花を好んで訪れるツマベニチョウが, 赤色ネットをもって立っていると, どこからともなくツマベニチョウが舞い降りてくるし, キアゲハやミヤマカラスアゲハなどの*Papilio*族が赤ネットに惹きつけられる観察例も多い。一方, ギフチョウに関しては赤系統のカタクリやコバノミツバツツジ, 白系統のサクラやモミジイチゴなどへの訪花が, また, ツマベニチョウが青系統のアサガオ類や白系統のフヨウなどを訪花する光景も観察できることから, 好む色を狭く特定するわけにはいかないが, いずれにしても蝶の種によって吸蜜植物の花の色に好みがあるのは疑いがないようにみえる。

ところが, モンシロチョウの色覚に関する研究では紫>黄>青>赤の順に反応が見られ, 赤色にはほとんど反応しなかったそうで, 実際には百日草などの赤い

花に蜜を求める光景が観察できる理由として, 赤い花にくる場合も花の芯部分が黄色であるとか, 赤い色に惹かれての結果ではないと説明されている(福田ら, 1982)。この事実は, 外観的にもっとも目立つ花びらの色だけで蝶が蜜源として好む植物だとするのは正しくないことを示唆している。

これまでに観察された本種の吸蜜植物を普通に識別する花の色で分類すれば, 黄色: アメリカセンダングサ, ミヤコグサ, カタバミ, ニガナ; 白: ヨメナ, シロツメクサ, ヒメジョオン; 紫: キツネノマゴ, ツリガネニンジンとなる。ヨメナでは黄色の花芯が明瞭で, ツリガネニンジンの5本の雄しべはわずかに黄色を帯びており, 本種が黄色系統に惹かれる傾向が推定できる。本種が活動する時期の草原に咲く花を季節とは無関係に列挙すれば, ノアザミ, セイタカアワダチソウ, ニワゼキショウ, タンポポ, リンドウ, オオイヌノフグリ, イヌセンブリなどがあり, 本種による吸蜜植物を見逃している可能性の方が高いかもしれない。

兵庫県加古川市は, 全国的に減少傾向にある絶滅危惧IB類選定の本種がミヤコグサを食草として安定的に生息している数少ない貴重な地域となっている。ミヤコグサはススキやチガヤなど繁殖力が強く背丈の高い植物が周囲に繁茂すれば, その勢いに負けて生育を維持できないが, 適度の野焼きが行われる環境では, むしろ強く根をはって安定的生育を維持できており, そのような環境下で本種も逞しく世代をつないでいる。先述したように, 本種の飛翔行動範囲は広くなく, ミヤコグサが群生する場所が見つかってもしそこに本種が生息している例はむしろ少ない。それだけに本種については吸蜜植物も含めて生息環境の維持が最も重要である。

参考文献

- 広畑正巳・近藤伸一, 2007. 兵庫県の蝶. 330pp. p.152, 岩峰社, 東京
 福田晴夫ほか, 1982. 原色日本蝶類生態図鑑(I). 277pp. p.185, 保育社, 東京

¹⁾ Masami SHIMAZAKI 兵庫県高砂市



写真1 ミヤコグサ.



写真2 カタバミ.



写真3 ヨメナ.



写真4 アメリカセンダングサ.



写真5 ツリガネニンジン.